結婚志願

森村　桂

結婚志願

森村　桂

結婚志願

昭和五十四年　八　月二十五日　第一刷発行

著　者　森村　桂

発行者　野間省一

発行所　株式会社講談社
東京都文京区音羽二―一二―二一／郵便番号一一二
電話東京(〇三)九四五―一一一一(大代表)／振替東京八―三九三〇

印刷所　慶昌堂印刷株式会社

製本所　株式会社国宝社

定　価　六五〇円

落丁本・乱丁本はお取り替えいたします
© Katsura Morimura 1979, Printed in Japan

0093-163686-2253(0)　(文1)

結婚志願　目次

友は嫁こうと　7
花ムコ募集開始　25
男なら大志を抱け　35
あこがれのサラリーマン　60
プロポーズはドライブで　70
外国船の船長夫人　88

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

アメリカ会社のエリート社員　102
お見合します　124
これが〝玉の輿〟　142
世に男はいないのか　181
結婚なんかするもんか　196
「天国にいちばん近い島」が招んだ人　223

装幀　小坂一也
カット　宮田武彦

結婚志願

友は嫁(い)こうと

「モリ、いくつ？」
「二十六」
「恋人いる？」
「いない」
「結婚しないの？」
「する」
そこまで聞くとわが友達どもは、ヘエ、といった顔をする。そして気の毒そうな目で、
「大変じゃない」
という。そういう友達どもは同い年か二つ下ぐらいで、もう子どもがいる。

「何でさ」
「売れのこるわよ」
「うん」
「誰かいないの」
「いない」
それからため息をついて、適齢期というのは今、二十四までで、二十五がせいぜい、二十六といったらもう売れ残りだ、というのである。
「そう、じゃあ、私、売れ残ったんだ」

女性週刊誌を開くとどれもこれも、二十四歳、結婚しましょう、売れ残らないためには、これこれしかじか、「お見合を成功させる法」、「プロポーズさせるチャンスを作るには」と、書いてある。グラビアを開いてみると、「このハイミスたちの豊かな生活」とかいうのがある。その一人が何と二十六歳。
「オールドミスにならず、ハイミスになろう」というのがある。ハイミスがオールドミスと違うためには、「美しく、教養があり、生活能力がある」ことだそうだ。それなら、売れ残ってもみっともなくないんだそうだ。
さて私は大学は出たけれど、勉強したわけじゃないから教養があるとはいえない。生活能力

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

なんて、身体が弱い上失敗ばかりして、勤めていた出版社では全く役に立たなかったから、もうどこの会社に就職する勇気もないし、第一入れてくれない。大事な大事な美しいという条件にもまるではずれる、となると私は売れ残り、オールドミスになるというもんだ。

人様のつけた名前はどうでもいい、オールドだろうがハイだろうが、私の知ったことじゃない、だが気がつくと私はもう満二十六、結婚したって早すぎる歳では決してない。

気がついてみると、あっという間の友達たちの変化よ。大学時代、毎日夜中まで語りあった友。

「もしもし、ヨッチ、うん、私。すぐ来て」

そう言えばすぐ飛んで来た友。それが、

「もしもし、モリです。今忙しい？　ダンナは？　そう、うん、いやいいの、またひまなとき、うん」

なんてがまんしなきゃならなくなったとは。私が就職運動に苦しみ、やっとはいれてあくせく働いていた婦人文化社時代の一年七ヵ月の間に、友達たちはそれぞれコースを決めていた。それでもおととしのお正月辞めた時、まだ仲間の半分は、フリーだった。それが、私がおととしの秋から去年の春までニューカレドニアへ行ってる半年の間に変った。

帰ってすぐ、私はなつかしいコダに会った。結婚した友だけど、結婚前とまるで変らなくつき合っていられた友だ。コダは赤ん坊が生れたので実家に帰っていた。私はニューカレドニア

から帰って来てまだ興奮していたから、夢中でしゃべった。ヤシ林のことを、土人たちのことを、船の中のことを。以前だったら、目を輝かせて先をうながしたコダ、そのコダが浮かないのだ、私はその理由に気がつかなかった。

私には、コダの態度が理解できなかった。思い返す限り、コダはいつでも私の味方だった。私が何か言えば、それがよっぽど変てこりんなことでも、ニヤッと目を光らせる特有の笑いをして、

「それでさ……」

と続きの話をひきとる友だった。そうだ、コダと私の間は、実に息があっていた。一方の興味のあるものは必ず相手も興味があった。私は、コダの赤ん坊について、何とも聞かなかったことにはじめて気がついた。

翌日、私はコダの家に行った。ニューカレドニアから帰ってからゴタゴタと用事ができたり、帰って来てからの整理、世話になった人たちへの挨拶、そんなことで忙しくひまがないところをかけつけた。コダは喜んだ。

「わあ、ゲジゲジマユ」

「そうなんだ、あっちに似ちゃってさ」

コダは上機嫌だった。そう言えば今までは友達や親しい後輩に赤ん坊が生れると、すぐに行ってたんだっけ。だからコダには真先にかけつけるべきだった。コダにすまなかったなと思っ

た。

「色が黒いな、でも男の子だからいいや、目が大きいのがとりえだな」

たいして可愛い子でもないが、コダの子だと思うと可愛かった。だが帰り道、私は淋しかった。コダの身体つきから動作、表情が、もう私の友達コダではなく、女であり、母親であると知ったことが、寂しかった。私はもうコダと昔のようにはしゃべれないだろうことを知らなければならなかった。

寂しい。その寂しさが、私にもそういう人が、という心にまでは発展しなかった。私はこの時張切っていた。ニューカレドニアの思い出があった。生れてはじめて、たまらなく書きたかった。それに、コダがいないのは寂しいけど、友達は他にもいた。前を向いてる友達がいた。仏文の大学院へ行ってるミケもいたし、アフターケアーセンターという施設出身者をはげます会にいた頃の仲間、勝江さんもいた。ミケはフランスへ留学することを考えてるし、勝江さんは、理髪師になってハサミ一丁で世界中まわることを考えている。コダ一人が友達じゃなかった。

勝江さんがやってきた。男性を連れてる。

「これ、いつか言った彼です」

あっ、これはこれはどうぞどうぞとなって、彼女のバクダン宣言。

「そんなわけで、来月……」
「来月！　って五月？」
「ええ、郷里ですることになったんです。手紙で書こうと思ったんですけど、照れくさくて、あんまりゴタゴタしちゃったから」
まあいい、勝江さんは私より二つ上、いずれ彼とは結婚することになってたんだ。
「で、ハサミ一丁の件は」
「あっ、あれ」
ケタケタ笑うだけだ。バカにしちゃって。本気になって方法考えてあげて損しちゃった。

ミケはありがたい、まだ学生だ。ミケから電話。
「ああ私よ。どうしたの」
「あの、この間相談しようと思ったんですけど……」
いやに丁寧で切り口上だ。
「うん」
「お忙しそうだったもんで、あの、突然なんですけど」
「うん、うん、行くの？」
「え、あら知ってるの？」

「知らない」
「決めちゃったんです」
「そうよ、早いとこ決心した方がいい、行っちゃいなさい。お母さんの方は私が説得する」
「いえ、母は賛成なんです」
「じゃあいいじゃない。で、お金どのくらい足んないの」
「お金?!」
「うん、借金手伝うよ」
「モリ、どうしたの、婚約したのよ」
「婚約、誰と」
「お見合したの」
ああ裏切られた。結婚したらおしまいだ、する前に必ず行くんだ、モリも行かなきゃダメよと、ニューカレドニアへ行く前にけしかけたくせに。
「そりゃあ私だってフランス行きたかったわ。だけどモリが行ってる間に友達ほとんど決っちゃったのよ」
「私がいるじゃない」
「モリはいいわよ、自分の道進んでるんだもん」
「殺生なこと言わないでよ。自分こそ大学院行ってるくせに。それでいつ?」

「十月なの」
「学校は？」
「卒論が大変だけど、卒業するわ」

まあいい、やって下さいどうぞどうぞ、友達はミケや勝江さんがすべてじゃない。演劇やってるトンもいるし、ピアノのエーコもいる。
「友達減ってつまんないな」
エーコが来たのでつぶやくと、彼女いさましい。
「何言ってんの、行く人は早く行かせちゃいましょうよ。私達はしなけりゃならないことがあるわ。私は三十になるまで、誰が何といっても結婚しないわ。損ですもの。私は何しろ今一日八時間はピアノひかなきゃ追いつかないのよ。その他に作曲もあるでしょ、あと五年はみっちり勉強しなきゃ。今結婚したら今までのこと水の泡だわ。私は断然作曲家になるんですもの。それより何とかして早くオーストリアで勉強したい」
ああ、このエーコの目の輝き、何という頼もしさ。
夜になったらトンがやって来た。
「私もうつくづく考えちゃった。ねえ、モリ」
「うん」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c